



平成24年度 春季講座 第 | 回要旨

『武家の都鎌倉の製茶と喫茶文化』

講師：永井 晋さん(金沢文庫主任学芸員)

とき：平成24年5月13日(日) ところ：鎌倉芸術館

◎栄西茶樹招来説の誤り

茶道史という視点ではなく、茶の生産と消費を、政治・経済・文化という総合的な視点から、茶の通史という軸線にすえて捉えてみたい。

茶は奈良時代に遣唐使によって仏教と共に伝えられ、平安時代に漢詩文の世界や密教の儀礼として朝廷で用いられた。茶樹は大内裏の茶園で育成されたが、典薬寮か主殿寮が管理、蔵人所や穀倉院が茶園を管理し、生産に携わった。また大内裏以外にも平安初期の嵯峨天皇が畿内近国に植樹させるなど、茶樹の育成と茶の生産は朝廷の官僚組織のもとに制度化されていった。嵯峨天皇のころは特に漢文学が栄え、茶は中国文化への憧れと結びついて盛んに飲用されるようになった。それ以降も詩歌管弦の雅の場で酒や茶が楽しまれた。一方寺院でも修法に組み込まれた茶の需要を満たすために寺院の敷地や寺領に茶園が営まれた。

茶樹は日本でも自生できる帰化植物でありながら、あまり記録に残らなかったのは、茶の生産が通常業務化していたからに他ならない。栄西は茶の新しい喫み方を移入したのであって、茶を招来したというのは俗説に過ぎず、それによって古代と中世との間に断絶を作るという誤った歴史が生じることになった。

◎鎌倉と茶

源家三代の時代、平教盛の子の小川法印忠快は実朝の信任を得て密教の修法を盛んに行った。天台密教葉上派の僧侶として活躍した栄西は中国で学んできた禅を広めたが、茶は本寺の延暦寺から供給を受けている。北条政子の帰依を受けて寿福寺開山長老となるが、これは私人としての活躍と見るべきで、寿福寺は公的な鎌倉将軍家の祈願所ではなかった。

武家の鎮護・将軍家の安泰を祈願する幕府の公的な寺社は鶴岡八幡宮・勝長寿院・永福寺・大慈寺以下いくつかに限られていた。それぞれ神と仏または天台と真言が弘通しており、各寺社は特定の宗旨に固執しなかった。

四代将軍頼朝の時代になると、父の摂政・関白九条道家が多くの殿上人・諸大夫・僧侶・陰陽師を鎌倉に派遣したことにより、茶の消費はさらに進んだ。源家将軍時代よりも、将軍御所を内裏に準じて清浄に保つよ

う最大の注意を払うようになり、災厄を払うための修法がより重んじられ、それに応じて茶の消費が激増する。この時期には興福寺の勢力圏にある大和茶も鎌倉に供給された。

儀式や修法で用いられるこれらの茶は煎じ茶であり、抹茶は小人数の席で使用する私的空間の茶であった。また茶の供え方について、『秘抄口決』第三十六「北斗法」には、最上は茶の粉を仏供のように盛り上げ、中品茶は茶葉よくこれを煎じ、下品茶は葉を盛るとある。また『秘抄問答』巻第十四末には、仏に備える茶は白い器を用いるのを例にするとあり、鎌倉も京の作法に倣って白土器を用いており、多くの出土品がある。

◎禅宗と茶

将軍御所は聖なる空間として清浄が保たれていたが、本来武家はもっとも忌み嫌われた血の穢れに関わった存在である。穢れは神が嫌うものであるから、それを払おうとする武家の願望に応じたのは、主として天台・真言密教の修法であった。武家の間に人気があった禅宗は、将軍家を神聖に保とうとする密教の修法と異なった対処の仕方をした。禅宗は戦闘を職業とする武家の本性や個人の抱える様々な問題に向き合い、禅の作法により行動の仕方を示唆した。相手の心に入りそれを受け止めたのが禅であった。茶は禅の作法の中でも多用されている。

◎鎌倉での茶の流行

弘長二年(1262)西大寺の長老叡尊が鎌倉に下向して養生の薬として茶を広めた。西大寺系律宗は茶の栽培・生産に携わる職人集団を擁しており、鎌倉では極楽寺・称名寺以下の律院が茶の栽培を始めるに及んで、十四世紀の初めごろから生産量が拡大した。それに伴って茶は儀礼の席から日常的な贈答品へと展開していく。律院では職人にも酒茶をふるまったことから茶は庶民の間にも広まっていった。鎌倉時代末期には、梅野茶(高山寺で開発された茶)かそれ以外の茶かを当てる闘茶が始まっている。

鎌倉・南北朝における関東地方の茶の普及に関しては称名寺に多くの記録がある。称名寺・東禅寺・永興寺・戒光寺の四律院や、高幡不動・中山法華経寺などそれぞれ茶園を持ち茶の生産に当たっていたことが分かる。